

2重共変解析力学

中嶋 慧

January 8, 2021

Abstract

この記事は、数理物理 Advent Calendar 2020 の 14 日目の記事である。まず、ゲージ理論における共変微分を解説する。次に共変微分を使って書かれたオイラー・ラグランジュ方程式を解説する。最後に、共変解析力学と 2020 年の論文 [2] で提案された 2 重共変解析力学を解説する。2 重共変解析力学の正準方程式は、

$$D\phi^A = (-1)^{(p+1)q} \frac{\partial H}{\partial \pi_A}, \quad (0.1)$$

$$D\pi_A = -(-1)^p \frac{\partial H}{\partial \phi^A} \quad (0.2)$$

である。ここで、 ϕ^A は p 形式であり、

$$\pi_A := \frac{\partial L(\phi, D\phi)}{\partial D\phi^A} \quad (0.3)$$

は q 形式である ($q := D - p - 1$, D は時空の次元)。 $L(\phi, D\phi)$ はラグランジアン密度に体積形式をかけたものであり、ラグランジアン形式と呼ばれる。 $D\phi^A$, $D\pi_A$ は共変微分である。また、

$$H(\phi, \pi) := D\phi^A \wedge \pi_A - L(\phi, D\phi) \quad (0.4)$$

はラグランジアン形式 $L(\phi, D\phi)$ のルジャンドル変換である。

Contents

1	共変微分	2
1.1	導入	2
1.2	一般の共変微分	3
1.3	共役形式の共変微分	3
1.4	ゲージ場の共変微分	6
2	共変微分で書かれたオイラー・ラグランジュ方程式	6
2.1	物質場	6
2.2	ゲージ場	7
3	2重共変解析力学	7
3.1	共変解析力学	7
3.2	2重共変解析力学	8

1 共変微分

この章は [1] を参考にした。

1.1 導入

ラグランジアン密度 $\mathcal{L}_0(\psi, \partial_\mu \psi)$ が、場の量の組 $\{\psi^A\}_{A=1}^N$ の大域的変換

$$\psi'(x) = T(\varepsilon)\psi(x), \quad \psi = {}^t(\psi^1, \dots, \psi^N) \quad (1.1)$$

で不変だと仮定する。 $T(\varepsilon)$ はある線形リー群 G の表現である。ただし、 $\varepsilon = \{\varepsilon^r\}_{r=1, \dots, n}$ は実パラメーターの組で、すべての r に対して $\varepsilon^r = 0$ のときが恒等変換に対応する。微小変換は、

$$\delta\psi := \psi' - \psi = \varepsilon^r G_r \psi \quad (1.2)$$

である。ただし、 G_r は群 G のリー代数の基底の表現である。 G_r の交換関係は、

$$[G_r, G_s] = f_{rs}^t G_t \quad (1.3)$$

となる。 $f_{rs}^t (= -f_{sr}^t)$ は構造定数と呼ばれる実定数である。

このとき、

$$D_\mu \psi := \partial_\mu \psi + \mathbf{A}_\mu \psi \quad (1.4)$$

という量を導入する。これを共変微分と呼ぶ。 \mathbf{A}_μ は以下の変換則が成り立つように決める：

$$D'_\mu \psi' := \partial_\mu \psi' + \mathbf{A}'_\mu \psi' = T(\varepsilon(x)) D_\mu \psi. \quad (1.5)$$

ここで、 $\psi' = T(\varepsilon(x))\psi$ である。このとき、 $\mathcal{L}_0(\psi, D_\mu \psi)$ はゲージ不変である。

(1.5) より、

$$\mathbf{A}'_\mu = T \mathbf{A}_\mu T^{-1} - \partial_\mu T \cdot T^{-1} \quad (1.6)$$

を得る。ところで、上式の右辺第2項は、

$$-\partial_\mu T \cdot T^{-1} = a^r_\mu G_r \quad (1.7)$$

と書ける [1]。 a^r_μ は実数である。いま、

$$\mathbf{A}_\mu^{(0)} := A^r_\mu G_r, \quad (1.8)$$

$$\mathbf{A}_\mu^{(1)} := \mathbf{A}_\mu - \mathbf{A}_\mu^{(0)} \quad (1.9)$$

とおく。 $\mathbf{A}_\mu^{(1)}$ は G_r の線形結合では書けない部分である。これらはそれぞれ、

$$\mathbf{A}_\mu^{(0)'} = T \mathbf{A}_\mu^{(0)} T^{-1} - \partial_\mu T \cdot T^{-1}, \quad (1.10)$$

$$\mathbf{A}_\mu^{(1)'} = T \mathbf{A}_\mu^{(1)} T^{-1} \quad (1.11)$$

と変換する。 $\mathbf{A}_\mu^{(1)}$ は、(1.5) を満たすためには不要であり、0であっても困ることはない。よって、 $\mathbf{A}_\mu^{(1)} = 0$ とおく。このとき、

$$D_\mu \psi = \partial_\mu \psi + A^r_\mu G_r \psi \quad (1.12)$$

となる。 A^r_μ がゲージ場である。

1.2 一般の共変微分

一般に、微小変換 (1.2) に伴い場の組 $\{\phi^A\}$ が、

$$\phi'^A = \phi^A + \varepsilon^r (G_r)^A_B \phi^B \quad (1.13)$$

と変換するとき、共変微分を、

$$(D_\mu \phi)^A := \partial_\mu \phi^A + A^r_\mu (G_r)^A_B \phi^B \quad (1.14)$$

と定める。

さて、 $\{\psi^A\}$ が微分形式で、微小変換 (1.2) に伴い

$$\psi'^A = \psi^A + \varepsilon^r (G_r)^A_B \psi^B \quad (1.15)$$

と変換するとき、微分形式で書いた共変微分は、

$$D\psi^A := d\psi^A + A^r (G_r)^A_B \wedge \psi^B \quad (1.16)$$

である。ここで、

$$A^r = A^r_\mu dx^\mu \quad (1.17)$$

はゲージ場を表す 1 形式である。

1.3 共役形式の共変微分

微分 p 形式 β ($p = 0, 1, \dots, D$) が微分形式の組 $\{\alpha^i\}_{i=1, \dots, k}$ で表されていると仮定する。もし変分 $\delta\alpha^i$ の下で β の変分が

$$\delta\beta = \delta\alpha^i \wedge \omega_i \quad (1.18)$$

のように書けるとき、 ω_i を β の α^i による微分と言い、

$$\frac{\partial\beta}{\partial\alpha^i} := \omega_i \quad (1.19)$$

と書く [1]。すなわち、

$$\delta\beta = \delta\alpha^i \wedge \frac{\partial\beta}{\partial\alpha^i} \quad (1.20)$$

である。

オイラー・ラグランジュ方程式は、

$$\frac{\partial L}{\partial\psi} - (-1)^p d \frac{\partial L}{\partial d\psi} = 0 \quad (1.21)$$

である。ただし、 L はラグランジアン形式 (ラグランジアン密度に体積形式をかけたものであり、 p 形式 ψ とその外微分 $d\psi$ とで表される) である。

ψ^A に対して、

$$\pi_A := \frac{\partial L}{\partial d\psi^A} \quad (1.22)$$

を共役形式と呼ぶ。

ϕ^A を p 形式とする。 p はラベル A に依存してもよい。今、場の変換

$$\phi'^A = f^A(\phi^B) \quad (1.23)$$

を考える。ただし、

$$J_B^A := \frac{\partial f^A}{\partial \phi^B} \quad (1.24)$$

が存在し、0でない成分は0形式と仮定する。つまり、変換後の p 形式の場が、変換前の p 形式の場だけで表されると仮定する。 J_B^A は場に依存しても良いとする。更に、 J_B^A の逆行列 K_B^A が存在し、外微分可能と仮定する。また、ラグランジアン形式 L は場の変換で不変だと仮定する。例えば、ゲージ変換はこの条件を満たす。このとき、

$$\pi'_A = K_B^A \pi_B \quad (1.25)$$

であることを以下で示す。ここで、 π_B は ϕ^B の、 π_A は ϕ'^A の共役形式である。

さて、仮定より、

$$\delta\phi'^A = J_B^A \delta\phi^B \quad (1.26)$$

である。この式を外微分して、

$$d\delta\phi'^A = dJ_B^A \wedge \delta\phi^B + J_B^A d\delta\phi^B \quad (1.27)$$

を得る。これより、

$$\delta\psi^A = K_B^A \delta\psi'^B, \quad (1.28)$$

$$\delta d\psi^A = K_B^A \delta d\psi'^B + (-1)^p \delta\psi'^B \wedge dK_B^A \quad (1.29)$$

を得る¹⁾。ここで、 $dK_B^A = -K_C^A dJ_D^C K_D^B$ および $\delta d\psi^A = d\delta\psi^A$ を用いた。上2式を、

$$\delta L = \delta\phi'^A \wedge \frac{\partial L}{\partial \phi'^A} + d\delta\phi'^A \wedge \frac{\partial L}{\partial d\phi'^A} \quad (1.30)$$

に代入し、

$$\delta L = \delta\phi'^A \wedge \frac{\partial L}{\partial \phi'^A} + d\delta\phi'^A \wedge \frac{\partial L}{\partial d\phi'^A} \quad (1.31)$$

と比べることで、

$$\frac{\partial L}{\partial \phi'^A} = K_B^A \frac{\partial L}{\partial \phi^B} + (-1)^p dK_B^A \wedge \frac{\partial L}{\partial d\phi^B}, \quad (1.32)$$

$$\frac{\partial L}{\partial d\phi'^A} = K_B^A \frac{\partial L}{\partial d\phi^B} \quad (1.33)$$

¹⁾ ψ^A も、 $K_B^A \neq 0$ となるような B に対する ψ'^B も、同じ p 形式である。 p は A に依存してもよい。

を得る。(1.33) は (1.25) である。

よって、ゲージ変換

$$\psi'^A = [T(\varepsilon(x))]^A_B \phi^B \quad (1.34)$$

に伴い、共役形式は、

$$\pi'_A = [T(\varepsilon(x))^{-1}]^B_A \pi_B \quad (1.35)$$

と変換する。特に微小変換では、

$$\psi'^A = \psi^A + \varepsilon^r (G_r)^A_B \phi^B, \quad (1.36)$$

$$\pi'_A = \pi_A - \varepsilon^r (G_r)^B_A \pi_B \quad (1.37)$$

である。よって、共役形式の共変微分は、

$$D\pi_A = d\pi_A - A^r (G_r)^B_A \wedge \pi_B \quad (1.38)$$

である。

また、ゲージ場の共役形式を

$$\pi_r := \frac{\partial L}{\partial dA^r} \quad (1.39)$$

とする。ゲージ場はゲージ変換で (1.10) と変換する。これは、

$$A'^r = [\text{Ad}(T)]^r_s A^s + a^r \quad (1.40)$$

の形に書ける。Ad(T) は随伴表現である²⁾。よって、

$$\frac{\partial A'^r}{\partial A^s} = [\text{Ad}(T)]^r_s \quad (1.41)$$

であり、(1.33) より、

$$\pi'_r = [\text{Ad}(T)^{-1}]^s_r \pi_s \quad (1.42)$$

である。微小変換では、

$$\pi'_r = \pi_r + f^s_{rt} \varepsilon^t \pi_s \quad (1.43)$$

である。よって、 π_r の共変微分は、

$$D\pi_r = d\pi_r + f^s_{rt} A^t \wedge \pi_s \quad (1.44)$$

である。

²⁾ $T = \exp(\varepsilon^r G_r)$ なら、 $[\text{Ad}(T)]^t_s = [\exp(\varepsilon^r \text{ad}(G_r))]^t_s$, $[\text{ad}(G_r)]^t_s = f^t_{rs}$ である。

1.4 ゲージ場の共変微分

ゲージ場の共変微分は、

$$DA^r := dA^r + \frac{1}{2}f^r_{st}A^s \wedge A^t =: F^r \quad (1.45)$$

である。 F^r はゲージ場の曲率であり、ゲージ変換に対して、

$$F'^r = [\text{Ad}(T)]^r_s F^s \quad (1.46)$$

と変換される [1]。

2 共変微分で書かれたオイラー・ラグランジュ方程式

ゲージ理論では、物質場 ψ^A の微分は共変微分 $D\psi^A$ の形でのみラグランジアン形式に含まれる。また、ゲージ場の微分も共変微分 DA^r の形でのみラグランジアン形式に含まれる。よって、 ϕ^A を物質場またはゲージ場とすると、その共役形式は、

$$\pi_A = \frac{\partial L}{\partial D\phi^A} \quad (2.1)$$

となる。

以下で示すように、共変微分で書かれたオイラー・ラグランジュ方程式は、

$$\frac{\partial L}{\partial \phi^A} - (-1)^p D \frac{\partial L}{\partial D\phi^A} = 0 \quad (2.2)$$

である。これは、

$$\frac{\partial L}{\partial \phi^A} - (-1)^p D\pi_A = 0 \quad (2.3)$$

と書ける。

2.1 物質場

まず、 ψ^A を物質場とし、 $L_0(\psi^A, D\psi^A)$ を物質場のラグランジアン形式とする。作用の ψ^A についての変分は、

$$\begin{aligned} \delta S &= \int_V \delta L_0(\psi^A, D\psi^A) \\ &= \int_V \left[\delta\psi^A \wedge \frac{\partial L_0}{\partial \psi^A} + \delta D\psi^A \wedge \pi_A \right] \end{aligned} \quad (2.4)$$

である。ここで、

$$\begin{aligned} \delta D\psi^A \wedge \pi_A &= \delta d\psi^A \wedge \pi_A + A^r (G_r)^A_B \wedge \delta\psi^B \wedge \pi_A \\ &= d(\delta\psi^A \wedge \pi_A) - (-1)^p \delta\psi^A \wedge d\pi_A + (-1)^p \delta\psi^B (G_r)^A_B \wedge A^r \wedge \pi_A \\ &= d(\delta\psi^A \wedge \pi_A) - (-1)^p \delta\psi^A \wedge D\pi_A \end{aligned} \quad (2.5)$$

なので、

$$\delta S = \int_V \delta\psi^A \wedge \left[\frac{\partial L_0}{\partial \psi^A} - (-1)^p D\pi_A \right] + \int_{\partial V} \delta\psi^A \wedge \pi_A \quad (2.6)$$

となり、第2項は消えるので、(2.3)を得る。

2.2 ゲージ場

ラグランジアン形式

$$L = L_0(\psi^A, D\psi^A) + L_{\text{Gauge}}(DA^r) \quad (2.7)$$

を考える。このゲージ場での変分は、

$$\delta L = \delta A^r \wedge J_r + \delta DA^r \wedge \pi_r \quad (2.8)$$

である。ここで、

$$J_r := \frac{\partial L_0}{\partial A^r} \quad (2.9)$$

である。また、

$$\begin{aligned} \delta DA^r \wedge \pi_r &= \delta dA^r \wedge \pi_r + \delta A^r \wedge f_{rt}^s A^t \wedge \pi_s \\ &= \delta A^r \wedge (d\pi_r + f_{rt}^s A^t \wedge \pi_s) + d(\delta A^r \wedge \pi_r) \\ &= \delta A^r \wedge D\pi_r + d(\delta A^r \wedge \pi_r) \end{aligned} \quad (2.10)$$

なので、オイラー・ラグランジュ方程式は、

$$D\pi_r + J_r = 0 \quad (2.11)$$

または、

$$\frac{\partial L}{\partial A^r} + D\pi_r = 0 \quad (2.12)$$

となる。これは(2.3)である。

3 2重共変解析力学

3.1 共変解析力学

この節では[1]を参考に共変解析力学を解説する。

Hamilton form を、

$$H = H(\phi, \pi) := d\phi^A \wedge \pi_A - L \quad (3.1)$$

で定義する。 π_A は ϕ^A の共役形式である。 H は ϕ^A と π_A とで表される。 H の変分は、

$$\begin{aligned}\delta H &= \delta d\phi^A \wedge \pi_A + d\phi^A \wedge \delta\pi_A - \delta\phi^A \wedge \frac{\partial L}{\partial\phi^A} - \delta d\phi^A \wedge \frac{\partial L}{\partial d\phi^A} \\ &= (-1)^{(p+1)q} \delta\pi_A \wedge d\phi^A - \delta\phi^A \wedge \frac{\partial L}{\partial\phi^A}\end{aligned}\quad (3.2)$$

と書ける。ここで、 ϕ^A は p 形式で、 $q := D - p - 1$ である。 π_A は q 形式である。これより、

$$\frac{\partial H}{\partial\phi^A} = -\frac{\partial L}{\partial\phi^A}, \quad \frac{\partial H}{\partial\pi_A} = (-1)^{(p+1)q} d\phi^A \quad (3.3)$$

を得る。オイラー・ラグランジュ方程式 (1.21) を代入して、正準方程式

$$d\phi^A = (-1)^{(p+1)q} \frac{\partial H}{\partial\pi_A}, \quad (3.4)$$

$$d\pi_A = -(-1)^p \frac{\partial H}{\partial\phi^A} \quad (3.5)$$

を得る。

3.2 2重共変解析力学

この節では [2] で提案された 2 重共変解析力学を解説する。

Hamilton form を今度は、

$$H(\phi, \pi) := D\phi^A \wedge \pi_A - L(\phi, D\phi) \quad (3.6)$$

で定義する。 H の変分は、

$$\begin{aligned}\delta H &= \delta D\phi^A \wedge \pi_A + D\phi^A \wedge \delta\pi_A - \delta\phi^A \wedge \frac{\partial L}{\partial\phi^A} - \delta D\phi^A \wedge \frac{\partial L}{\partial D\phi^A} \\ &= (-1)^{(p+1)q} \delta\pi_A \wedge D\phi^A - \delta\phi^A \wedge \frac{\partial L}{\partial\phi^A}\end{aligned}\quad (3.7)$$

となる。よって、

$$\frac{\partial H}{\partial\phi^A} = -\frac{\partial L}{\partial\phi^A}, \quad \frac{\partial H}{\partial\pi_A} = (-1)^{(p+1)q} D\phi^A \quad (3.8)$$

を得る。(2.3) を (3.8) に代入して、

$$D\phi^A = (-1)^{(p+1)q} \frac{\partial H}{\partial\pi_A}, \quad (3.9)$$

$$D\pi_A = -(-1)^p \frac{\partial H}{\partial\phi^A} \quad (3.10)$$

を得る。これが 2 重共変解析力学の正準方程式である。

References

- [1] 中嶋慧, 松尾衛『一般ゲージ理論と共変解析力学』(現代数学社, 2020 年).
- [2] L. Castellani and A. D’Adda, “Covariant Hamiltonian for gravity coupled to p -forms”, Phys. Rev. D **101**, 025015 (2020). [arXiv:1906.11852v2]